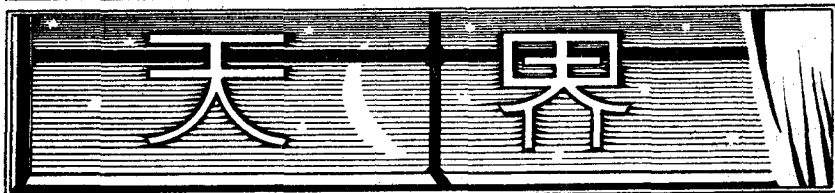


奉祝 新皇子殿下御生誕



第七十六號 (第十六卷)

(昭和十年) 十二月號

天文学を本来の姿へ歸せ

(卷 頭 言)

すべての文化が發達しつつあると同時に、だん々其れが「専門化」しつつあることは、果して良いことか、悪いことか？疑はれる點が多い。

天文学も勿論“日進月歩”の姿であるが、其の“進歩”の内容は、要するに細かく分化し、専門化し、又、技術化する傾向のみが著しくて、一般の民衆も、『天文学のこうした“進歩”は全く止むを得ないもの』と考へ、多くのアマチュアも、結局其の「アマチュア」たることから脱却して、専門家になりたがり、技術者の仲間に入りたがる傾向が見える。しかし、吾輩は思ふに、こうした「専門化」は大きい誤りであると考へる。人生の文化要素として存在する天文学は決して“せまく、深く”進むことのみが望ましいのではないのであつて、どこまでも、やはり、廣い接觸面を一般の人生との間に持つことを維持しなければならないと思ふ。

どこの國の天文發達史をしらべて見ても、大昔しから近世に至るまでは、天文が常に哲學や、宗教や、藝術と密接な交渉を持つてゐたのであつて、支那などは天文が政治家や哲學者や精神的指導者たちの必須學であつた。従つて、天文の存在理由は實に大きいものであつた。しかるに、第十八世紀の頃から、歐洲にニウトンの力學論が盛んに流行するに至つて、天文は甚だしく數學的な専門の色彩を帶び、従つてアマチュアの追蹤を許さなくなつた。之れと同時に、世界の交通が便利になつたため、各國各地の特異な天文学が皆西洋流の天文に統一されることになつて了つた。故に、くり返して言ふやう

であるが、今日の天文學といふものは、昔しの各地の多種多彩な天文に比べて甚だ單調であり、専門技術的であり、無趣味であり、無味乾燥であり、狭量であり、唯物的であり、排他的であり、“ひとりよがり”である。そして此うした惡傾向を、内外共に、未だ誰も氣付かず、これで良いものだと言つた風であるのは不思議と言はねばならない。

今日のまゝに放任して置くと、例へば“星の美の問題”、“天體宇宙の雄大感”、“バビロンの天文宗教”、“古代エジプトの文化内容”、“東洋の古典思想”、“支那の政治哲學”、“インドの哲學思想”、“ギリシヤ藝術の背景”等々々の多くの問題が、現代の天文家たちには、全く無縁のものとして顧みられず、だからと言つて、天文家以外の、誰もが又、やはり、之等の重大な問題を取り上げるべく無資格のものであることを暴露するのである。

吾輩は、先般、暫く朝鮮と滿洲と北支の各地を旅行して見て、此の感を一層深くした次第である。慶州にも、京城にも、開城にも、平壤(樂浪遺跡)にも、奉天にも、北平にも、旅順にも、金州にも、至る所、天文を機縁として開かれた人間文化の跡があり、尙ほ、嘗に過去の事蹟のみならず、將來の文化要素中にも、亦、天文に期待すべき點の暗示を多く見た。

一體、今日の學術系統に於いて、天文學が、大學の理學部の一部分にのみ含まれてゐるのが變態であつて、事實は、文學部にも、農學部にも、工學部にも、法學部にも、經濟學部にも、皆、天文は何等かの交渉があるのであるから、むしろ、一つの獨立學部として「天文學部」を置くか、又は單科大學として「天文大學」といふ Institution が設けられても、少しも差し支へ無いのである。世界中の人が此の點に殆んど未だ氣付いてゐないのは、けだし現代の“奇觀”であるといひたい。

今日、既に天文家として立つてゐる専門家たちは、もはや、こうした固定した思想になりきつてゐるのであるから、止むを得ないのだけれど、願はくは、ひろいアマチュア諸君の中には、現代の天文の狭い型に囚はれないで、常に自由な見地から古今の文化組織を見なほし、本來の天文學が、正にあるべき形を卒直適確に認識して、花やかなる天文文化の再建設を志して貰ひたいものである。(山本)